

イタリア・ルネサンス建築研究

ヴォルフガング・ロッツ 著／飛ヶ谷 潤一郎 訳

A5 判上製函入 本文 458 ページ 挿図 233 点 定価 15,750 円 (本体 15,000 円+税)

ISBN978-4-8055-0580-9 C3070

ヴォルフガング・ロッツの著作の邦訳は本書が初めてなので、わが国では彼の名はあまりなじみがないかもしれないが、ペリカン美術史叢書の『イタリア建築 1400 年～1600 年 Architecture in Italy 1400-1600』の著者のひとりであり、ヘルツィアーナ図書館の館長も務めた経験があるといえ、思い出される方も多いかもしれない。この書の前半部にあたる 1400 年～1500 年を彼の師ルートヴィヒ・H・ハイデンライヒ、後半部にあたる 1500 年～1600 年をロッツが担当し、現在はイエール大学出版からそれぞれ分冊の形で出版されているが、いずれにしても邦訳が出版されていないのは残念に思われる。

わが国におけるイタリア・ルネサンスの研究は、とりわけ美術史の分野では、巨匠研究を中心として早くから行われてきた。だが建築史の分野では、アルベルティ、ヴィニョーラ、パラディオなどの主要な建築書が邦訳されてはいるものの、各国語に翻訳されているような重要な研究書であっても十分に紹介されているとはいえない。例えば、近年邦訳が出版されたアルナルド・ブルスキ著『建築家ブラマンテ』のイタリア語の初版本は 1969 年で、ただちに英語で翻訳されたにもかかわらず、わが国に紹介されるまでには 30 年以上もかかってしまった。このような例は枚挙に暇がないが、たとえ長い期間がかかったとしても出版されるのはまだよいほうであって、実際に紹介されるのはほんのわずかに過ぎない。

現在のわれわれにとって建築素描や版画、また都市の歴史を対象とした研究テーマは特に新しいとは思えないにちがいない。しかし、もっぱら建築家の作品研究が中心であった当時、これらの新しい方法論がロッツによって開拓された意義は大きい。実際、彼の著書は出版から四半世紀経過した今もなお、欧米では古典的名著として建築史や美術史の専門家はむろんのこと、建築家や建築専攻の学生にも広く読まれている。というのも、欧米の大学における西洋建築史講義の場合、ひとりの教官が国内国外および古代から近現代までを全て担当するようなことはまずありえず、大学院の講義のように最新の研究成果を反映した高度な内容となるのが一般的なもので、ロッツの著作や前掲のブルスキ『建築家ブラマンテ』（もちろん縮小版だが）が期末試験用の推薦図書にもなりうるからである。本邦訳書にそのような役割は期待できないけれども、少なくとも建築専攻の大学院生や実務に携わる建築家には興味をもっていただけるものと確信している。

(本書訳者あとがきより)

ペルッツィ、サン・ピエトロ大聖堂計画 (フィレンツェ、U2A)

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-7読売中公ビル内
電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取扱いは

イタリア・ルネサンスの建築と都市計画の研究に建築素描や版画を用いるという資料解釈における美術史学と建築史学の融合を試みた新しい方法論を確立した碩学、ヴォルフガング・ロットの建築論集。

目次

第一章 十六世紀の楕円形の聖堂空間

ジェイムズ・S・アッカーマンによる序文／英語版の序文

序／十六世紀における楕円の作図と建築書における用語／十六世紀の建築書と楕円形の古代建築／ペルッツの楕円形平面をもつ建物の計画／セルリオ／パラディオ／ヴィニョーラ／バルマのサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂／サン・ジャコモ・デリ・インクラービリ聖堂／オッタヴィアーノ・マスケリーノの楕円形計画／ヴォルテッラによるサンタ・プデンツィアーナ聖堂の横断方向の楕円形ドーム／モンドヴィの巡礼聖堂／その他の十六世紀末の楕円形計画／結論

第二章 イタリア・ルネサンスの建築素描における空間像

序／アルベルティの『建築論』における画家の素描と建築家の設計図のちがひ／十五世紀の画家による透視図法／フィラレーテの『建築論』における内部空間の表現／レオナルド・ダ・ヴィンチとフランチェスコ・デイ・ジョルジョの鳥瞰断面図／コナー手稿における内部空間の表現／建築家に対する画家の優越性／ブラマンテの建築に見られる絵画的な内部空間／ブラマンテによる内部空間の表現の意義と影響／小結（その二）／ペルッツとジュリアーノ・ダ・サンガッロによる複合的な透視図法／ジュリアーノ・ダ・サンガッロのバルベリーニ手稿／ラファエッロのレオ十世宛書簡における正射影断面図の登場／小結（その二）／パントオンの素描にまつわる諸問題／透視図法の名人ペルッツ／アントニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョーヴァネによる正射影断面図の確立／結

第三章 ルネサンスの集中式聖堂についての覚書

第四章 イタリア十六世紀の広場

序／古代のフォルムの伝統／フィラレーテの『建築論』に見られる市場／ヴィジェーヴァノのドゥカレ広場とピエンツァのピウス二世広場／アスコリ・ピチエーノのポポロ広場／フィレンツェのサンティッシマ・アンヌンツィアータ広場／ヴェネツィアのサン・マルコ広場とピアッツェッタ／ローマのカンピドリーオ広場／ポローニヤのマジジョーレ広場／結

第五章 ヴィジェーヴァノのドゥカレ広場 十五世紀末の君主のフォルム

第六章 サンソヴィーノのヴェネツィアでの建築作品に見られる古代ローマの遺産

第七章 イタリア十六世紀後期の建築

第八章 パラディオに関する三つの論稿

パラディオの建築素描についての所見／都市計画家としてのパラディオについての省察／ラ・ロトンダ／ドームを備えた世俗建築

第九章 マゼールのテンピエット 覚書と省察

第十章 パラディオとサンソヴィーノ

第十一章 十六世紀の建築素描における寸法の単位について

ヴォルフガング・ロットとルネサンス建築の歴史編纂 マッシモ・ブルガレリ／訳者あとがき／ヴォルフガング・ロットの著作目録（一九三八年～一九八九年）／主要参考文献／人名索引／地名・事項索引

■著者略歴

ヴォルフガング・ロット (Wolfgang Lotz, 1912-1981)

ハイルブロン（ドイツ）生まれ。フライブルクで法学、ミュンヘンで美術史を学ぶ。ルートヴィヒ・H・ハイデンライヒの指導の下でヴィニョーラの建築に関する学位論文を提出し、1937年にハンプルクで学位取得。戦後、ミュンヘン中央美術史研究所でハイデンライヒの所長代理をつとめた後、1952年に渡米。リチャード・クラウトハイマーの後任としてヴァッサー・カレッジ、およびニューヨーク大学美術史研究所で教授をつとめた。1962年から1980年までローマのヘルツィアーナ図書館館長。代表的な著作としては本書の他に、ハイデンライヒとの共著によるペリカン美術史叢書の『イタリア建築：1400年～1600年』（1974年）などがある。

■訳者略歴

飛ヶ谷潤一郎 (ひがや・じゅんいちろう)

1972年東京に生まれる。東北大学工学部建築学科卒業。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。1999年から2002年にかけてパドヴァ大学哲学部およびローマ「ラ・サピエンツァ」大学建築学部留学。2004年に東京大学大学院博士課程修了、博士号（工学）取得。日本学術振興会特別研究員として東京芸術大学美術学部建築科に在籍。2008年より東北大学大学院准教授として着任、現在にいたる。

■中央公論美術出版 既刊書

盛期ルネサンスの古代建築の解釈

飛ヶ谷潤一郎 著

ルネサンスの建築家たちが設計において手本とした古代建築が、彼らの作品にいかなる理由で、そしてどのように表現されているのかという問題を設定し、従来の研究は扱われなかったギリシアやエトルリアをも含めた古代建築の解釈を検討することにより、誤解という否定的側面が、新たな建築の創造という側面で重要な役割果たしたことが論じられる、ルネサンス建築研究の必備の労作である。

B5判上製函入 本文四三四ページ カラー口絵四ページ

定価 三,一〇〇円（本体三,〇〇〇円＋税）